第一章　朝顔姫君の物語　昔の恋の再燃

［第一段　九月、故桃園式部卿宮邸を訪問］

斎院は、*御服にて(おんぶくにて、御父宮の御服喪のために)下りゐたまひにき*かし(退下為さって御出でだったのです)。　*「服(ぶく)」は＜薬を飲むこと、飲食すること＞または＜喪服、服喪＞と古語辞典にある。注には＜朝顔君は父桃園式部卿宮の薨去により喪に服し、斎院を退下。式部卿宮の薨去は「薄雲」に語られている。＞とある。なお、Wikipedia の「崩御」の項目ページに身分社会上の表現として、「律令制下においては貴人の死を指して崩御(ほうぎょ)の他、皇太子や大臣などの死を意味する薨御(こうぎょ)、親王や三位以上の死を意味する薨去(こうきょ)、王や女王、四位・五位以上の死を意味する卒去(しゅっきょ)などの尊敬語が用いられた。その他、主な死の尊敬語としては逝去(せいきょ)などがある。」との記事があった。　*「かし」は＜確かそのようだったはず＞の思いを込めたような語感だが、真意はその遠慮がちな言い方でする＜念押し＞なので、一種の丁寧語なのだろう。

大臣、例の、思しそめつること(一度思いを寄せた相手には)、絶えぬ御癖にて(執着なさる御性格なので)、御訪らひなどいとしげう聞こえたまふ(様子伺いの使者に菓子折りを持たせて斎院の許に頻繁にお見舞い申しなさいます)。宮(斎院宮は)、*わづらはしかりしことを思せば(かつて在らぬ噂に煩わされた事を御思いになって)、御返りもうちとけて聞こえたまはず(お返事も馴れ馴れしくは申し上げなさらなかったので、)。いと口惜しと思しわたる(光君はとても物足りなく思い続けていらっしゃいました)。　*「煩はしかりしこと」について、注は＜『集成』は「賢木の巻に、源氏が雲林院滞在中、斎院に文通したことが見え、源氏と斎院の文通のことが右大臣と弘徽殿の大后の間で話題になっている。そのことは斎院の耳にも入っていたのであろう」。『完訳』は「姫君が源氏を「わづらはしかりし」と思う過去の具体的な事実は不明。情交はなかったらしい」と注す。＞としてある。雲林院参詣は桐壺院崩御の翌年の光君 24 歳の秋で、ちょうど 8 年前のことだが、確かに当時の朝顔斎院は雲林院に近い紫野院で潔斎生活をしていて、二人が和歌の贈答をした記事もあり、それが右大臣家で悪評されていた記事もあった。ただ、15 年前の光君 17 歳の夏に左大臣家から方違えして宿を求めた紀伊守邸で、其処の女房たちが光君と朝顔姫君との噂話をしていた記事が「箒木」巻に有って、その後にも他の巻に何度か文通の記事もあったが、一貫して朝顔姫が光君と一定の距離を置き続けたらしいので、潔斎時の俗事が最も煩わしそうではあるが、それだけに特定せず、ずっと事あるごとに悩まされてきた、と考えても良さそうだ。それの方が「絶えぬ御癖」に対応した解釈にも見える。ところで、朝顔姫が光君に悩まされた、煩わされたと言っても、迷惑一方だったということでもないだろう。およそ人間個体は種の維持発展を担うべく生命設計されている。その生命原理に個体の行動様式は規定されるが、特に子孫継承に直接関わる男女関係においては、各個体は同質性と異質性の均衡の上で大いに動揺せざるを得ない。同質性が無ければ理解し合えないし、異質性が無ければ可能性が広がらない。ただし同質性が強過ぎて、ほぼ同一質と見做す相手には血の継承の観点からは存在意義を見出せない。光君と朝顔君とは父親が兄弟の従兄妹で、朝顔にしてみれば光は格好良い自慢の兄に近い認識だったかもしれない。また、格好良いだけに自分が数多い女の中の一人になる事を宮家の自尊心で警戒した、ということもあるかもしれない。なお年回りだが、紫君はこの年で 24 歳、明石君は私見では 27 歳、斎宮女御は 23 歳だが、朝顔君は明示は無いが 10 代の頃からの旧知であってみれば光君との年齢差はせいぜい 5 歳以内かと見込まれるから 28 歳くらいと見当する。現代でもそうだが、当時なら相当な年増で、家柄からも付き合いの経緯からも、光君にのめり込まずに来たことが一定の見識を窺わせる存在では有る。尤も、光君がその姫の見識に惹かれたであろうことも推量できる。

長月になりて(九月になって)、*桃園宮に渡りたまひぬるを聞きて(斎院が実家の桃園宮にお帰りになったことを聞いて)、女五の宮のそこにおはすれば(御叔母の女五の宮が其処にお住まいだったので)、そなたの御訪らひにことづけて参うでたまふ(そのお見舞いを口実にして光君はお出かけ申し為さいました)。　*「桃園宮(ももぞののみや)」は今の西陣辺りにあった屋敷らしい。左京一条大宮ということは当時の内裏の真ん前の一等地だ。注には＜父桃園式部卿宮の薨去は夏ころ。朝顔の君は斎院退下直後は別の所にいて、九月に桃園宮に移った。＞とある。　*「女五の宮」は＜桃園式部卿宮と兄妹。故桐壷の妹宮。葵の上の母は三の宮。＞と注にある。

故院の、この御子たちをば(故桐壷院が御自身の王族御兄妹を)、心ことにやむごとなく思ひきこえたまへりしかば(特に大事に思い申しあそばされたようですので)、今も親しく*次々に(今でも親しく故院の子である光君の代になっても)聞こえ交はしたまふめり(お付き合い申しなさって御出でのようです)。　*「つぎつぎに」は＜孫子の代まで＞。

同じ寝殿の西東にぞ住みたまひける(同じ正殿の西に朝顔君、東に五の宮がお住まいでした)。*注に＜寝殿の西の間に朝顔の君、東の間に女五の宮。＞とある。東が上座と言うことなのか、後述で明示されるのか、その辺りの説明は無い。

ほどもなく荒れにける心地して(式部卿が亡くなってほどもないが既に手入れが行き届かずに屋敷が荒れてきているように思われて)、あはれにけはひしめやかなり(何とも気配がしめやかでした)。

宮(五の宮が)、*対面したまひて(東表南面の廂口まで出座しなさって簀子の光君に直接面会なさり)、御物語聞こえたまふ(色々とお話し申しなさいます)。いと古めきたる御けはひ(とても老け込んだご様子で)、しはぶきがちにおはす(咳き込みがちでいらっしゃいます)。*年長におはすれど(姉上に当たる)、故大殿の宮は(故太政大臣の御方である三の宮は)、あらまほしく(お元気で)古りがたき御ありさまなるを(老けていない御見栄えなのに)、もて離れ(それに引き換え年下の五の宮の方は)、声*ふつつかに(声も張りが無く低くて)、*こちごちしくおぼえたまへるも(女らしい柔らかさに欠けるように感じられるのも)、*さるかたなり(人それぞれです)。　*「対面(たいめん)」は＜顔をあわせること＞とあるから、直接話し合ったと思われる。それでも普通なら、光君ほどの貴人なら室内に招くのが礼儀かと思われ、両者とも廂の間か、宮が母屋で光が廂とか、が想定されるが、後述される文に光が縁側の簀子に座して庭を眺めたかの記述があるので、どうやらこの場面では宮が正殿南正面の廂の縁側端まで出座していたらしい。貴人の光君とはいえ故院の妹宮にしてみれば目下の甥であり、光君にしても御機嫌見舞いの挨拶であってみれば、明るい表向きの庭先での面会が気楽だったのかもしれない。　*「年長」は「このかみ」と読むらしく、「兄」の字を当てることもあるようで、意味も＜兄弟姉妹の中で年上の兄、または姉＞と古語辞典にある。　*「ふつつか」は＜太い＞で逞しさを表すが、＜野太いー粗野なー雅でない＞から＜不調法＞まで表す事がある。　*「こちごちし」は＜ごつごつして柔らかさが無い＞。　*「さるかたなり」は＜それ相応の結果＞なのか＜仕方が無い＞なのか、単に＜それなりに過ぎない＞のか、決め難い。で、少し逃げて＜それなり＞の言い換えにしたが、＜それ相応で仕方が無い＞という意味の「有力者と結ばれなかったので仕方ありません」という言い換えも、姉の三の宮こと故太政大臣の正妻を引き合いに出した文運びからして捨て難いので、あえてノートして置く。

「院の上、隠れたまひてのち、よろづ心細くおぼえはべりつるに、年の積もるままに、いと涙がちにて過ぐしはべるを、この宮さへかくうち捨てたまへれば(式部卿までこのように先立ちなさっては)、いよいよあるかなきかに、とまりはべるを(いよいよ生きた心地もせずに生き残っておりましたが)、かく立ち寄り訪はせたまふになむ(貴君がこのように私の所に立ち寄ってお見舞い下されたので)、もの忘れしぬべくはべる(憂いも忘れてしまいそうです)」

と聞こえたまふ(と叔母宮は申しなさいます)。

「かしこくも古りたまへるかな(たいそう老け込まれたな)」と思へど(と光君は思ったが)、うちかしこまりて(威儀を正して)、

「院隠れたまひてのちは、さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず、おぼえぬ罪に当たりはべりて、知らぬ世に惑ひはべりしを、*たまたま(稀な事に)、朝廷に数まへられたてまつりては(帝から公務に就くようにお呼びを掛けられ申してからは)、またとり乱り暇なくなどして(また雑事に追われておりまして)、年ごろも(ここ数年は)、参りていにしへの御物語をだに聞こえうけたまはらぬを(此方へ参上して故院の思い出話さえ申し上げまたお聞きも致さずに居ります事を)、いぶせく思ひたまへわたりつつなむ(気に掛け続けてきております)」　*「たまたま」は＜偶然に＞の意味で、今日でも他にうまく説明の付かない場合などに良く使うが、此処は目上の人に改まって無沙汰に至る経緯を釈明する挨拶なので、＜偶然＞よりは＜必然＞を訴えないと失礼な論調になる。また、「偶々」と「偶然」の漢字表記に一致感を期待しすぎるのも危険だ。とはいえ、過剰な高揚感も軽薄なので＜運良く＞とまでは言えないが、＜稀な事に＞なら＜偶然に＞よりは着地感が増す。

など聞こえたまふを(などと申し上げなさるのを)、

「いともいともあさましく(本当にとても浅ましく)、いづ方につけても定めなき世を(貴君や義兄の故大殿が不遇に遭った朱雀院の御世を)、同じさまにて見たまへ過ぐす(王家の一員として故院の御世と同じように独身で見守って暮らしていると)命長さの恨めしきこと多くはべれど(長生きが辛く思える事が多くありましたが)、かくて(こうして貴君が)、世に立ち返りたまへる御よろこびになむ(政権に復帰なさった御慶事の今となっては)、ありし年ごろを見たてまつりさしてましかば(あの浅ましい時代を見守り申している途中で死んでしまったなら)、口惜しからましとおぼえはべり(もっと残念だっただろうと思えるところです)」

と、うちわななきたまひて(五の宮は感激して声を震わせなさって)、

「いときよらにねびまさりたまひにけるかな(本当に美しく成長なさいましたね)。童にものしたまへりしを見たてまつりそめし時(小さくいらした頃に初めて御会いした時に)、世にかかる光の出でおはしたることと驚かれはべりしを(実際にこのような光り輝く子がお生まれになった事に驚かさせられましたが)、時々見たてまつるごとに(それから時々御会いする度に)、ゆゆしくおぼえはべりてなむ(怖いくらいの美しさだと思ったもので御座います)。内裏の上なむ(今の帝が)、いとよく似たてまつらせたまへりと(貴君にとても良く似ていらっしゃると)、人びと聞こ

ゆるを(皆が申しているのを)、さりとも(そうは言っても)、劣りたまへらむとこそ(貴君には及びなさらないだろうとは)、推し量りはべれ(見ているのですよ)」

と、長々と聞こえたまへば(今更に申しなさるので)、

「ことにかくさし向かひて人のほめぬわざかな(特に面と向かっては人は褒めないものだが)」と(と光君は叔母上の昔ながらの子ども扱いを)、をかしく思す(可笑しく御思いでした)。

「山賤になりて(無位無官で地方をさまよって)、いたう思ひくづほれはべりし年ごろののち(ひどく落胆していた年月の後は)、こよなく衰へにてはべるものを(私は比べ物にならないほど衰えてしまいましたと言うのに、)。内裏の御容貌は(帝の御姿は)、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ(伝説の佳人でさえ劣るだろうと)、ありがたく見たてまつりはべれ(もったいなく拝顔しておりまして、)。あやしき御推し量りになむ(叔母上は間違ったお見立てでしょう)」

と聞こえたまふ(と光君は申しなさいます)。

「時々見たてまつらば(時々このように貴君に御会いできたら)、いとどしき命や延びはべらむ(随分と私の寿命も延びることでしょう)。今日は老いも忘れ、憂き世の嘆きみな去りぬる心地なむ」とても(と言っては)、また泣いたまふ(五の宮はまたお泣きになります)。

「三の宮うらやましく、*さるべき御ゆかり添ひて(貴君の若君を孫として育てた御縁で)、親しく見たてまつりたまふを(貴君と親しく御会い申しなさるのを)、うらやみはべる(羨ましく思います)。この亡せたまひぬるも(この度亡くなったこの桃園院の故式部卿宮も)、さやうにこそ悔いたまふ折々*ありしか(その事を残念がっていたことも確かありましたよ)」　*「さるべき御縁添ひて」は逐語で＜そうあるべきご縁が加わって＞で、この言い方のまま意訳すると＜良いご縁に恵まれて＞になるかと思う。その光君と左大臣家の＜良い御縁＞が葵の上の、死であるはずは無く子を儲けて母たる三の宮に孫を作った事であるのは、この場の両者にとっては自明である。会話に於いては、当事者間で自明の事柄を客観表現ではなく主観表現するほうが意味があるので、この文も逐語かその意訳が本文の味わいを残す言い換えだろうとは思う。しかし分かり易さを考えれば、有り得る範囲で客観表現を補語する言い換えの方が親切だ。 *この「ありしか」の「しか」は、自分が見聞きした事への語用なので＜確かそうだった＞という強調だ。ただし、文法上では＜そうだったでしょうか＞という疑問文にもなりえる。是は「しか」の「し」が過去の助動詞「き」の已然形(いぜんけい、条件構文用の語尾変化)で、「か」が疑問ないし確認の助詞だからである。何だか少し面白そうなので、更に考えてみる。「き」は過去を示す、ということは、何かしらの物事が一定の状態に収まったこと、を示しているワケだ。「か」は「彼」という対象指定句で＜其処に見えている物＞のことだろう。つまり第三者の「し↓か↑」は＜その小包の中身は何だ？＞であり、当事者の「し↑か↓」なら＜この小包の中身はこういう物です。＞となる。というわけで、「しか」を＜かくかくしかじか＞とのように「しか」と考えてみた。

とのたまふにぞ(と仰る宮の言葉には)、すこし耳とまりたまふ(光君は朝顔君との子造りに思いを馳せてか、すこし耳を留めなさいます)。

「さも(そのように朝顔君と)、さぶらひ馴れなましかば(側で親しく成れていたなら)、今に思ふさまにはべらまし(今頃は私の願いも適っていた事でしょう)。皆さし放たせたまひて(朝顔君はいつも私を遠ざけなさって、いたので残念でした)」

と(と光君は)、恨めしげにけしきばみきこえたまふ(恨めしげに気負って申し上げなさいます)。

[第二段　朝顔姫君と対話]

あなたの御前を見やりたまへば(そして、向こう側の御仁である朝顔君の様子が知りたくて西表の方を見流しなさると)、枯れ枯れなる(一面に枯れ掛けた)前栽の心ばへもことに見渡されて(庭先の草花の様子が晩秋の風情を漂わせているのが見渡されて)、のどやかに眺めたまふらむ(それを今の御自分の境遇に相応しいと落ち着いて御覧に為っているであろう朝顔君の)御ありさま、容貌も(御様子や御姿も)、いとゆかしくあはれにて(思い描けばあぁと思い遣られて)、え念じたまはで(もう堪え切れず)、

「かくさぶらひたるついでを過ぐしはべらむは(このように近くへお寄りした序でにお見舞い申し上げずに帰ってしまっては)、心ざしなきやうなるを(失礼に成ってしまいますから)、あなたの御訪らひ聞こゆべかりけり(あちらへご挨拶申し上げなければ為らないのでした)」

とて(と言って光君は五の宮の前から下がり)、やがて簀子より渡りたまふ(そのまま簀子の縁側を通って西表へ進みなさいます)。

暗うなりたるほどなれど(夕暮れ時でしたが)、*鈍色の御簾に(廂前に設けた喪中の青ねず色の御簾に)、黒き御几帳の透影あはれに(室内の御几帳の影が黒く透けて慎み深く感じられて)、追風なまめかしく吹き通し(風がしっとりと簾垂れを揺らして)、けはひあらまほし(風情は深みがありました)。　*注に＜朝顔の君の部屋の様子。暗くなって、喪中の鈍色または薄墨色の几帳の帷子がやはり鈍色の御簾に透けて黒く見える様子。＞とある。

簀子はかたはらいたければ(朝顔君の立場では内大臣を縁側に置いては失礼なので)、南の廂に入れたてまつる(女房が御簾を上げて光君を南廂にお入れ申し上げます)。*宣旨(宣旨という女房が)、対面して(応対に出てきて)、*御消息は聞こゆ(お話しを取り次ぎます)。　*「宣旨」は注に＜朝顔の君の女房。＞とある。　*「せうそこ」は＜連絡＞。「聞こゆ」は＜伝聞する＞。

「今さらに(今になって改めて)、*若々しき心地する御簾の前かな(若輩者の気分に成る御簾越しの面会ですね)。　*「若々し」は＜未熟な、子供じみている＞で、そういう＜若造のような＞ということなのだろう。それで、「若々しき心地」を＜若輩者の気分＞としたが、これは次の文に「神さびにける年月の労(長年の公務の功績)」とあるような、光君の一連の業務上の応答めかした洒落言葉の一環としての言い方、を踏まえた言い換えの心算でもある。なお、「御簾の前」は＜すだれ越しの仲介面会＞で、廂の光君に対して朝顔君は母屋の御簾内に居て直答を避けている。だから光君は、この言い方で「いまさらに(今日は叔父上の喪中見舞いに来たのに)わかわかしきここちする(ずいぶん世慣れぬ他人行儀な)みすのまへかな(すだれ越しの応対ですね)」と、従兄妹同士の親しみを込めて、もうお互いいい年なんだから直接本音で話し合いましょうと呼びかけたのである。ただ、権勢まみれの光君を神職を奉じた朝顔君が警戒するのは無理も無い。

*神さびにける(もったいなくも朝廷にお仕えした)年月の労数へられはべるに(長年の功労が認められまして)、今は*内外も許させたまひてむとぞ頼みはべりける(今では私は何処への出入りも御許し頂けるものと信じておりましたのに)」　*「神さぶ」は＜古びて神々しい、荘厳で神秘的＞と大辞泉にある。が、斎院にとって「かみさぶ」は文字通り＜神に侍ふ＞で、大臣にとっては＜朝廷に仕へる＞だ。注には＜斎院にちなんで「神さびにける」という。昔から長い年月の意。『完訳』は「官人が在任中の労を、年数を冠して、「--年の労」と申告して昇進を願い出るのになぞらえた表現」と注す。＞とある。ということは、この会話文は光君があえて、斎院を勤めた朝顔君に対してうやうやしい表現をとる事で、まるで事務的な形式ばった応対で打ち解けない態度でいる朝顔君を皮肉っている、という現代人には分かり難い当時の当事者同士の感性に則った書き方になっている、ということのようだ。　*「内外(ないげ)」自体は＜内側と外側＞および＜その出入り＞だが、＜長年の公務の功績＞を受ければ＜帝の御前への出入り＞であり、延いては＜何処への出入りも＞である。

とて(と言って)、飽かず思したり(光君は不満にお思いでした)。

「*ありし世は皆夢に見なして(昔のことは全て夢に思えて)、今なむ(只今は)、覚めてはかなきにやと(その夢から覚めて果敢無い世の中だと)、思ひたまへ定めがたくはべるに(空しく思いまして功績を認める判断など私には付きませんので、何をしても徒労に終わりますから)、労などは(労などは費やさず)、静かにやと(静かにすれば良いという)定めきこえさすべうはべらむ(結論を申し上げたいと存じます)」　*「在りし世」は＜昔＞という定型句のようで、朝顔君は光君が言った「今さらに」に応えて＜今までの過去＞の事を話した、らしい。で、その結果、私は実らぬ恋に虚無感に襲われて冷静な判断が下せないので、光君は働き振りを評価して欲しいと呑気に勝手な事を言うけれど、私のことでいくら労を惜しまず励んでみても、徒労に終わるので悪しからず、御免遊ばせオホホ‥、みたいに朝顔君は言ったとかいう事かしらネ、この文は。光君の直答を求める注文に対する朝顔君の回答という文脈を踏まえて解釈を試みるも、「定め」と「労」の絡みに混乱させられる難文だが、一応その線で言い換えておく。

と(と朝顔君は)、*聞こえ出だしたまへり(御簾の内から宣旨を介して廂の光君にはっきりとお断りの御応え申し出し為さいました)。　*「聞こゆ」は、この宮廷物語では「言ふ」の謙譲語の＜申し上げる＞という語用で多用されるが、此処では「出だす」が付くので、明快に意思表示の返答をしたという言い方であり、その内容は＜何度言っても無駄ですよ＞と断ったワケだ。尤も、「出だす」は＜動詞の連用形に付いて、動作が内から外に向かって行われる意を表す。＞と古語辞典にあるが、実際には＜仲介者をして話し相手に聞こえるように伝言申し上げさせた＞のだから、「ハッキリ言った」という以上は＜女房に取り次がせて＞という補語が情景描写上は必須なのだろう。

「げにこそ定めがたき世なれ(全て徒労だと貴方は言うが、なるほど確かに頼りない世の中だからね)」と(と光君は)、はかなきことにつけても思し続けらる(朝顔君が‘果敢無い’と言った言葉尻からもあれこれと連想なさいます)。

「人知れず神の許しを待ちし間に、ここらつれなき世を過ぐすかな　(和歌 20-01)

「神に仕えているからと、貴方をじっと待ったのに　(意訳 20-01)

*注に＜源氏から朝顔への歌。朝顔が斎院であったことにちなんで「神の許し」という。長年待ち続けたという気持ち。＞とある。素直に気持ちを語ったら、ちょうど５・７・５・７・７の語数に揃っていた、みたいな文句で、だ

から歌らしい情緒は＜素直さ＞だろうか。ほとんど川柳みたいな味わい。ただ、幼馴染というほどの長い付き合いの中でも、どうやらやはり「賢木」巻にあった光君が雲林院参詣の際に紫野の斎院潔斎所に籠もっていた朝顔君と和歌の贈答をして以来の経緯が、光君の専らの関心事らしいことが窺える歌、とは言えそうだ。時に光君は挨拶の手紙に添えてささやかな恋慕の歌を斎院に贈り、斎院は神職として拒絶の意は示したが、それを世俗に習って返歌で回答する、という幼馴染ならではの甘い対応をしてしまった。それを光君は持ち前の自惚れで＜厭よ厭よも好きの内＞と受け取った、ということらしい。

今は(斎院の勤めを果たされた今となっては)、何のいさめにか(貴方は何の戒めと言うことで)、かこたせたまはむとすらむ(私を避ける言い訳に為さる御心算ですか)。*なべて、世に(世の中全体に)わづらはしきことさへはべりしのち(天変地異まで起こってからは政務に復帰し)、さまざまに思ひたまへ集めしかな(さまざまの事を戒めて考え私は善政を積んで来ているのです)。いかで*片端をだに(どうかその実績をお認め下さり、せめて御簾内の隅だけでも座をお与え下さい)」*雲林院参詣中に斎院と和歌の贈答をしたのは8年前の光君24才の時である。六姫との密会露見が翌年の25歳の時。閑職となり須磨に謹慎したのが、その翌年の26歳の時。そして須磨の嵐、京都の落雷や疫病流行という天変地異があったのがその翌年は今から5年前の27歳の時だった。そして更に翌年は28歳の秋に兄帝の召還で中央復帰し、翌29歳の春に今上帝が即位し光君は内大臣に就いた。そして遂に、今年の春に先ず岳父の太政大臣が亡くなり、次いで藤壺入道宮が亡くなり、更に叔父宮にして朝顔君の父上である式部卿宮が亡くなり、この晩秋九月に光君は桃園院に喪中見舞いに訪れているのである。　*「かたはし」は＜一端、ものの一部＞とあるが＜片隅＞でもある。此処では＜功労の一部＞を認めて欲しいのではなく、＜隅で良い＞から御簾内の母屋で朝顔君と対面したい、ということだろう。意外なのは、光君にとって公務を果たす事が、方便や洒落言葉では無く実質で、朝顔君に認められるべき、誠意ある功労だと認識されているらしい事で、まさか「年月の労」で好意までは買えないにしても、光君にとって権力の誇示は驕りではなく正当な自己主張だったようだ。王族意識の現われだろうか。

と、あながちに聞こえたまふ(熱望申しなさる)、御用意なども(光君の御意気込みと言ったものも)、昔よりも今すこしなまめかしきけさへ添ひたまひにけり(以前に増して幾分情欲を露わにした気配さえ漂わせていらっしゃいました)。さるは(そうした血気盛んな御振る舞いを為さるには)、いといたう過ぐしたまへど(もうだいぶお年を召されていたが)、*御位のほどには合はざめり(従一位という最高位の御位階に御成りの割には若すぎて見える光君でした)。　*注に＜源氏の若々しさを強調して従一位の高さには不釣合だとする語り手の批評。＞とある。確かに、32歳で従一位というのは有り得ないほどの高待遇だったらしい。臣下であれば相当な高官であっても、追贈でさえ一位は適わないほどの高位だったようだ。しかし親王であれば、其の地位は別格で存在自体が尊く敬われる身分であり、どんな高官でも礼を失しては為らない人だから、もともとが親王であった光君であれば、臣下としてのどんな厚遇も不当には該たらない、という筋だろうか。と言っても、親王にも格差はある。親王の公費俸禄処遇格差は品(ほん)という規定で表される。成人した無品の親王は自前の収入がない惨めな立場なのであり、いくら存在自体が尊敬されると言っても、粗末な形で人前に出ることは高貴な身分だけに許されず、誰かの庇護を求めなければならないので、実質では嘲笑の対象でしかない。子沢山の天皇が皇子たちを臣籍降下させる所以だ。それに、国情の実勢把握は情報戦であり、実際に諸勢力とどれ程の主従関係を築けるかという、正に実質での政治力に於いては、国体の象徴に祭り上げられて権威を体現せねばならない天皇には個別の相対に取引や駆け引きを持ち掛けて自分の影響力を示す手段が無いので、其の地位に就くまでに実質で諸侯と主従関係を築いた初代を除けば実効支配力は無く、従って名目の最終決定者ではあっても、実質での予算裁量権は臣下にして其の最高実力者である大臣に委ねられるのであり、光君こそが

実勢で最強の王家を内実に持つ、という複雑さだ。なお、「めり」は古語辞典に＜目で見た事を推量の形で表す。(～のようだ)＞とあり、また＜話者にとっては確定的な事を婉曲に表現する＞ともある。

「なべて世のあはればかりを問ふからに、誓ひしことと神やいさめむ」(和歌 20-02)

「神の援けは要らないと、言わんばかりの思い遣り」(意訳 20-02)

*注に＜朝顔の返歌。「神」「世」の語句を受けて、「神の許し」を「神や諌めむ」と切り返す。＞とある。また、この歌は光君の添え詞を踏まえても居るので、「なべてよの」は＜復帰後の政権運営で＞を示し、「あはればかりをとふからに」は＜援助に予算を費やして＞を意味し、「ちかひしことと」は＜雲林院の念仏行で慎ましく暮らすと誓約したではないかと＞で、「かみやいさめむ」は＜神が貴方の反故を諌めて見せしめをお示しなさることでしょう＞と、王族らしい神学政争の言い回しを体裁しているが、真意は、斎院を勤めた私にこれ以上手を出すと天罰が下りますよ、という痛烈な忠告、というよりは半ば本気の脅しである。

とあれば(と朝顔君の御返歌があったので)、

「あな、心憂(おや、心外な)。*その世の罪は(神に滅私奉公を誓約した潔斎院と和歌を贈答した８年前の雲林院に参詣した時の罪は)、みな*科戸の風にたぐへてき(みな５年前の神風の嵐と共に過ぎ去ったのに)」　*「その世の罪」の「その世(その時)」は朝顔君が詠んだ「誓ひしこと(神への誓約)」をした潔斎院時代であり、「罪」は＜光君との和歌の贈答をしたこと＞だ。この段は会話文であり、女房を介してとはいえ光君と朝顔君の対話に他ならないのだから、相手の発言を受けて応える以外の文意は成立しない。先ず、光君が「なべて世(世の中全体)」に付いて語りだしたが、その際の述語で＜光君の復権後の功労＞が語られたので、この場では「なべて世」は＜光君復権後の時代の事柄＞を意味するようになってしまっている。そこで朝顔は、その「なべて世」を受けて＜復権後の光君の所業＞が「あはればかりを問ふから(実利に走って慎みが無いから)」「神やいさめむ(天罰が下るだろう)」とたしなめて、「誓ひしことと(雲林院での修行で節制を誓ったのにも関わらず)」と非難を強めた。そして今度は光君が、その「誓ひしこと」を受けて「その世」と返せば、光が雲林院参詣した時ということは、朝顔の潔斎院時代のことを言う事になる、という応酬だ。こうして整理しないと意味がつかめないのは情けないが、それほど此処にある言葉の一言一言が今ではその内容を実感できなくなっている。　*「しなとのかぜ」は＜日本神話で、風の神である級長戸辺命(しなとべのみこと)が起こす風。＞と大辞泉にあり、また＜風＞のことを語呂良く言う言い方でもあるようだが、此処では朝顔君が「神やいさめむ」と詠んだ言に対する反論なので、あえて＜神風＞と言い換える。それに、５年前の嵐に付いては、正に神話を踏まえた光君の再生を許した神々の業、という認識が光君自身には強く有る。ただし、光君の認識は朝顔君の認識とは一致する筈も無い。なお、「たぐふ」は＜同類のものに成る、させる＞で、此処では光君は＜風と共に去りぬ＞「てき(と思った)」ということだろう。

とのたまふ愛敬も(と軽口を仰る光君の返しも)、こよなし(実に洒落ています)。

「*みそぎを(それにまた、身を清めた主の覚悟を)、神は、いかがはべりけむ(神はどう受け取りなさったのでしょう)」　*注に＜宣旨の詞。朝顔に代わって答える。「恋せじと御手洗川にせし禊神はうけずもなりにけるかな」（伊勢物語）を踏まえる。＞とある。が、是は代返ではなく宣旨なりの追従だろう。因みに御手洗川の禊は、観光用に形式だけをなぞったものだとしても、葵祭りに先立つ重要な行事として、京都市民の中から選ばれた斎王代によって、今でも執り行われているようで、写真つきの紹介サイトもあった。ところで、引歌の字面は＜もう恋に現を抜かしたりしませんと御手洗川に禊をした私の清めの覚悟を神は真に受けなかったようで

す＞というもので、遊び人丸出しの色っぽさと言うか、不遜と言うか、性根が座ったと言うか、とにかく詠み手の恋一筋な生き様を思わせる。なので代返としてなど論外だが、宣旨の追従だとしても、この歌意を下敷きにした応対とはとても思えない。ただ、「みそぎ」というものが当時の宮廷人にどのように認識されていたか、を現代人に示す説明には優れた参照歌のようには見える。それより、宣旨がこの時点で当たり前のように「みそぎ」に気付いて、斯かる受け答えをする事自体に、当事の人々にとってこの一連の対話での語句が如何に自然に理解できる筆運びだったか、を改めて知らされて感心する。そこで、今に失われた言葉の意味を少しでも感じられればと理詰めを試みる。で、「みそぎ」だが、これは＜神に仕えるために俗世を離れて身を清めること＞だ。ところで、「神話」では子造りこそが神業である。ところが神に仕えるとなると、子造りは慎まなければ為らない。これはつまり、およそヒトは神の似せ物であって、その与えられた小さな立場の小さな場面で神の真似事の子造りに泣き笑いするのが俗世というものだ、という考え方に於いて、しかし神の次元は森羅万象を司る力量なので、それが乱れて天候不順や疫病蔓延が起きないように、と世の安泰を願って神に奉仕する時には、人はヒトの主体という立場を捨ててカミの従者たる僕となるために、俗世から離れなければ為らない、という理屈に拠るのだろう。

など(などと取次女房の宣旨が)、はかなきことを聞こゆるも(光君にちょっとした相槌を申しますのも)、まめやかには(朝顔主がかたくなに直答を拒むことは内大臣に丁寧に応対しなければならない女房の立場からすると)、いとかたはらいたし(とても具合が悪かったからです)。世づかぬ御ありさまは(世慣れしない朝顔主の御態度は)、年月に添へても(年々)、もの深くのみ引き入りたまひて(家の奥深くばかりに引き籠もりがちにお成りで、その所為か)、え聞こえたまはぬを(もう主は何も返事を為さらないでいらっしゃるのを)、見たてまつり悩めり(拝し申して宣旨は困っていたようです)。

「*好き好きしきやうになりぬるを(喪中見舞いに来たと言うのに、これではまるで私が姫宮に言い寄って、口説こうとしているみたいに成ってしまいましたね)」　*注に＜源氏の呟き。お見舞いのつもりが、が省略されている。＞とある。

など(などと言って光君は)、浅はかならずうち嘆きて立ちたまふ(残念そうに溜め息を吐いて帰ろうと立ち上がり為さいます)。

「*齢の積もりには、面なくこそなるわざなりけれ(この歳にしては、何とも面目ない次第に成ってしまったものです)。世に知らぬやつれを(この哀れこの上ない男を)、*今ぞ、とだに聞こえさすべくやは(せめてこの帰り際に少しでも慰め伝えなさろうというようには)、もてなしたまひける(お見送り頂けないものでしょうか)」　*「よはひのつもりには(年齢を重ねた者にとっては)」は、特に何処か前の会話文を受けている訳ではないが、「さるは(そうした血気盛んな御振る舞いを為さるには)、いといたう過ぐしたまへど(もうだいぶお年を召されていたが)、*御位のほどには合はざめり(従一位という最高位の御位階に御成りの割には若すぎて見える光君でした)。」という地文が下敷きになってはいる。　*「今ぞ」は＜今こそ＞で、この場面なら＜今の帰り際にこそ＞。「とだに」は「とばかり(ちょっと)」＋「だに(だけでも)」。「聞こえさす」の主語は相手の朝顔君だから、謙譲の＜申し上げる＞ではなく、仲介ならではの＜伝言なさる＞。で更に、光君の「やつれ」を受けて同情した朝顔君からの＜伝言＞なら「慰め」かと。此処の「べし」は＜～しよう＞という意思の助動詞。「やは～ける」の構文は疑問ないし反語とある。此処では＜～ようには、ならないものでしょうか＞という疑問形の言い回しによる、遠慮がちな要望。

とて(と言って光君が)、出でたまふ名残(お帰りになった残り香が)、所狭きまで(部屋に満ちて)、例の聞こえあへり(例によって女房たちがその雅を褒め合い申していました)。

おほかたの(ただでさえ)、空もをかしきほどに(空の色も寂しさを増す晩秋に)、木の葉の音なひにつけても(枯葉の乾いた音を耳にしては)、過ぎにしもののあはれとり返しつつ(女房たちは過ぎた日々の光景がよみがえって)、その折々(その時々に)、をかしくもあはれにも(嬉しくも悲しくも)、深く見えたまひし*御心ばへなども(深かろうとお見受け申した光君の御表情なども)、思ひ出で*きこえさす(思い出して姫君にお話申し上げます)。　*「みこころばへ」は「出でたまふ名残」によって、女房たちが「とり返しつつ」あったのだから、朝顔主ではなく光君の＜表情＞。　*此処の「聞こえさす」は謙譲語の＜申し上げる＞に違いないが、他の語用との違いを言い換えで表せば＜お話し申し差し上げる＞。

［第三段　帰邸後に和歌を贈答しあう］

心やましくて立ち出でたまひぬるは(光君は気持ちが収まらないままで二条院に帰り着きなさったので)、まして(いつにまして)、寝覚がちに(ねざめがちに、寝付けずに)思し続けらる(朝顔君のことを朝まで考え続けなさます)。とく御格子参らせたまひて(そして早めに格子戸を開け上げさせなさって)、*朝霧を眺めたまふ(庭の朝霧を眺めなさいます)。　*注に＜歌語として、「朝霧」は後朝の情調、いぶせさを象徴。＞とある。

枯れたる花どもの中に(枯れた花々の中に)、朝顔のこれかれに*はひまつはれて(朝顔のつるが此処其処に這い延びて)、あるかなきかに咲きて(盛りを過ぎて頼りなく咲いていたので)、*匂ひもことに変はれるを(発色が特にめずらしい一輪を)、折らせたまひてたてまつれたまふ(しもべに折らせなさって朝顔君にお礼状に添えて贈りなさいます)。　*「這ひ纏はる」は＜這うようにのびて巻きつく。這ってからみつく。＞と大辞泉にある。また、注に＜「朝顔」は蔓草として恋情の連綿とした気持ちを表象する。＞とある。　*「にほひ」は＜内側から立ち上がる香りや色＞。

「けざやかなりし(貴方が決然と直答を拒んで)御もてなしに(女房に取次ぎさせなさった昨日の会談には)、人悪ろき心地しはべりて(決まり悪く思っておりまして)、うしろでも(後姿も)いとどいかが(よほどみっともないものと)御覧じけむと(見ていらしたのだろうと)、ねたく(忌々しく思います)。されど、

見し折のつゆ忘られぬ朝顔の、花の盛りは過ぎやしぬらむ　(和歌 20-03)

あの日出会った朝顔は、もう笑わなくなったのか　(意訳 20-03)

*注に＜源氏の贈歌。「見し」にかつての逢瀬の体験をいう。「つゆ」は「露」（名詞）と「つゆ」（副詞）の掛詞。また「露」は「朝顔」の縁語。『集成』は「「朝顔」は、女の寝起きの顔の意を掛ける。「見しをりの」は、帚木の巻に「式部卿の宮の姫君に、朝顔奉りたまひし歌などを----」とあった時のことであろう。一体いつお逢いできるのでしょうか、と嘆く意」。『完訳』は「「朝顔」は朝の素顔でもあり、「見し」とともに情交を暗示。実際にはなかった関係を、帚木巻以来の呼称とも応じて表現」「花の盛りが衰えたかと、相手を揶揄して、相手の反応を強く要請する」と注す。＞とある。

年ごろの積もりも(長年積もり重なった私の恋情が)、あはれとばかりは(誠実なものだったということだけは)、さりとも(せめても)、思し知るらむやとなむ(御理解頂けるだろうとは)、かつは(一方では、期待申しております)」

など聞こえたまへり(などと光君は朝顔君にお伝え申しなさいました)。おとなびたる御文の心ばへに(穏やかな御手紙の文面なので)、「おぼつかなからむも(ぼやぼやといつまでも返事をしないでいては)、*見知らぬやうにや(失礼になる)」と思し(と朝顔君も御思いになって)、人びとも御硯とりまかなひて(女房たちも早速に紙と筆を取り揃えて)、聞こゆれば(ご用意申し上げれば)、　*「見知らぬやう」は分かり難い。手紙自体を＜まだ読んでいない＞のか、手紙の内容が＜理解出来ない＞のか、はたまた返事を直ぐに出すという世間の常識を＜心得ていない＞のだろうか。ただ、「にや(～になっては、いけない)」とあるので、「見知る」内容はごまかして、いずれにしても＜いけない＝失礼になる＞で片付けた。

「秋果てて霧の籬にむすぼほれ、あるかなきかに移る朝顔」(和歌 20-04)

「垣根に絡んで枯れ掛けた、昔の色の褪せた朝顔」(意訳 20-04)

*注に＜朝顔の返歌。「朝顔」はそのまま受けて、「露」を「霧」に「盛り過ぐ」を「移る」とずらして、おっしゃるとおり盛りを過ぎてひっそりとあるかなきかの状態で生きておりますと応える。『新大系』は「「朝顔」は、はかなさを象徴する花でもあり、ここでは「霧のまがき」とともに自らのはかない運命を表現して、贈歌を切り返す」と注す。＞とある。「あきはてて」は「秋果てて(秋の終りに)」と「飽き果てて(すっかり厭に成って)」、と更に朝顔君の歌ならではの穿った複意で「飽き果てて(斎院の勤めを果たして)」。「きりのまがき」は情景の「霧の籬(霧深い日の垣根)」と心象の「霧の籬(霧が立ち込めて垣根のように行く手をさえぎる時＝立ち往生して)」、と「切りの間垣(区切りの境＝潔斎の玉垣＝下鴨神社の井垣)」。「むすぼほる」は＜絡まる、固まる、気が塞がる、縁を結ぶ＞。「あるかなきか」は＜はっきりと見えない、弱気な、消え入りそうな、死に掛けた、目立たない＞。「うつる」は＜変わる、色があせる、乗り移る、死ぬ＞。「あさがほ」は＜朝の表情、植物名、直ぐ萎む果敢なさ＞。なので、表意は＜秋の終りに霧深い垣根に絡まって枯れ掛けて色も褪せて行く朝顔の花＞と晩秋の寂しさを痛々しく詠む。そして、その心情は＜その気はないので御応えの仕様もなく困り果てて弱気になって行くばかりの頼りなさです＞と、改めてこれ以上の恋情は迷惑だから遠慮してくれと訴えている。そして更に、理詰めで＜斎院を勤めた身としては俗世を捨てて下鴨神社と縁を結んだのだから後は静かに死を待つのみです＞と立場上の覚悟を示している。このように言葉を労すると、さも深読みのように見えてしまうが、それは単に説明が多いだけで、朝顔君には特別に意図した新展開の主張は無く、いずれの歌意も朝顔君らしい。

似つかはしき御よそへにつけても(こんな私に似つかわしい添えられた御花を見るにつけても)、露けく(涙がちになります)」

とのみあるは(とだけ朝顔君がお書きになったお返事は)、何のをかしきふしもなきを(少しも嬉しい事は書いてなかったが)、いかなるにか(どういう訳か)、置きがたく御覧ずめり(光君は手放しがたくいつまでも御覧になっていたようです)。青鈍の紙の(青ねずの紙に)、なよびかなる墨つきはしも(やわらかく書かれた墨跡も)、をかしく見ゆめり(光君は懐かしく御思いになったようです)。

とは申しましたものの、*人の御ほど(その人の御身分や)、書きざまなどに(字の美しさに)繕はれつつ(助けられて)、その折は罪なきことも(その時には問題の無いことでも)、*つきづきしくまねびなすには(忠実に再現して書き直してみると)、ほほゆがむこともあめればこそ(ひんしゅくものの具合の悪いことも有り得ますので)、*さかしらに書き紛らはしつつ(“どういう訳か”などと、わざと紛らわしい書き方をしていた内に)、おぼつかなきことも多かりけり(本当の所は如何だったか、良く分からないことも多くなってしまいました)。　*この文について注は＜『集成』は「以下、草子地」。『完訳』は「以下、語り手の弁」と注す。＞とある。確かに、何とも思わせぶりな言い回しの語り手の弁だ。素直に読めば、是ではまるで朝顔君が斎院たる神職の身の程をわきまえない応対を過去にしたか、今回も言外に親しげな書きざまをしたかのような印象を、わざわざ読者に提供しているわけで、書き手の意図は掴み難い。ただ、次の文に光君が更に朝顔君に手紙を贈る記述があって、それが必ずしも光君だけの暴走ではなく、朝顔君にもそれを許す甘さが有ったと暗示しているようでもあるが、そうだとしたらこんな曖昧な作者の弁では説得力が無い。　*「つきづきしくまねびなす」の逐語は＜如何にも似つかわしく真似て見せる＝そっくりに真似る＞だから＜忠実に再現する＞。　*「さかしらに」は＜利口ぶって＞よりは＜よく考えて＝わざと意図して＞。

*立ち返り(文面はともかく朝顔君の懐かしい筆跡と可愛らしい手紙の綴じ方に光君は触発されなさって、折り返して)、今さらに若々しき御文書きなども(いまさらに血気盛んなお手紙をすぐに重ねてお出しになるのは)、似げなきこと、と思せども(年がいも無いことと御思いになったが)、なほかく昔よりもて離れぬ御けしきながら(やはりこのように昔から突き放すでもない態度を朝顔君がお示しになりながら)、口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ(思いを遂げられないまま年月が過ぎてしまったことを振り返っては)、えやむまじくて思さるれば(とても諦めきれないと御思いになったので)、*さらがへりて(若い頃のように)、まめやかに聞こえたまふ(熱心に口説きなさいます)。　*「たちかへり」は＜折り返し、直ぐに返事を出す＞。言い換えには前の文を織り込んだ。　*「更返る」は＜昔に戻る＞。

[第四段　源氏、執拗に朝顔姫君を恋う]

*東の対に離れおはして(その後しばらくは光君は東の対に紫君から離れて日中を過ごしなさって)、宣旨を迎へつつ語らひたまふ(朝顔君の女房の宣旨を呼び寄せて相談なさいます)。　*注に＜二条院東の対。源氏の居室。宣旨を迎えて相談する。＞とある。

さぶらふ人びとの(桃園院に仕える女房たちで)、*さしもあらぬ際のことをだに(さして高官でもない男の誘い言葉にでさえ)、なびきやすなるなどは(流されやすい者などは)、*過ちもしつべく、めできこゆれど(場当たりの情交にも応えそうに、光君を褒め称え申し上げるが)、　*「さしもあらぬ際」は＜それほどでない身分のもの＝たいした高官ではない者＞。「こと」は「言」なら＜口説き文句＞で「事」なら＜言動＞だろうが、「言」のほうが分かり易い。　*「あやまち」は＜男女が出来心で結ばれること＞と古語辞典にあるが、結ばれるなら「過ち」とも思えず、むしろ後先を考えない＜行きずりの情交＞かと。

宮は(朝顔君は)、そのかみだに(その昔でさえ)*こよなく思し離れたりしを(歴然と光君に距離を取って御出でで)、今は、まして、誰も(たれも、どちらも)思ひなかるべき(恋思うことも無いような)御齢(おんよはひ、御歳や)、おぼえにて(世間体だということで)、　*「こよなし」は＜この上ない＞とあり、＜程度が格段に優れている、または劣っている＞という形容詞とある。しかし、どうも此処での

語用は別の意味に見える。勝手に類推すると、是は「こよ(実に大変なことよ、と目を見張る)」「成す(～ように為成す)」の形容詞化で＜傍目にもはっきりと分かるように＞の意だろう。

「はかなき木草につけたる御返りなどの(ちょっとした草花に結びつけた御返事の御手紙などが)、折過ぐさぬも(季節柄の風情を漂わせている事さえ)、軽々しくや(世俗の軽々しさだと)、とりなさるらむ(受け取られてしまうだろう)」など、人の物言ひを憚りたまひつつ(世間の噂話を気になさっては)、うちとけたまふべき御けしきもなければ(親しく為さろうという素振りもお見せにならないので)、古りがたく同じさまなる御心ばへを(昔ながらの変わらない朝顔君の御心向きを)、世の人に変はり(普通の人とは違っていると)、めづらしくもねたくも思ひきこえたまふ(珍重もし忌々しくも光君は御思いになります)。

世の中に漏り聞こえて(それが世間に漏れて噂されて)、

「前斎院を(ぜんさいゐんを)、ねむごろに聞こえたまへばなむ(親しんで光君が頻繁にお手紙を差し上げなさったので)、女五の宮などもよろしく思したなり(女五の宮も桃園院と光君の縁が深まるかと喜んでいらしたようです)。似げなからぬ御あはひならむ(お二人は似合わないでも無い御取合せなのでしょう)」

など言ひけるを(などと女房たちが言っていたのを)、対の上は伝へ聞きたまひて(紫君は伝え聞きなさって)、しばしは(初めの内は)、「さりとも、さやうならむこともあらば(そうは噂されても、そうしたことがあるなら)、隔てては思したらじ(隠し立ては為さらないだろう)」と思しけれど(とお思いだったが)、うちつけに(気になって)目とどめきこえたまふに(様子を窺っていらっしゃると)、御けしきなども(光君の御言動が)、例ならずあくがれたるも心憂く(いつになく気もそぞろなのも疑わしく)、

「まめまめしく思しなるらむことを(本気で結婚を考えていらっしゃるらしい相手の前斎院のことを)、つれなく戯れに言ひなしたまひけむよ(殿は素っ気無く冗談のように言いなしなさったのだわ)」と(と紫君は御思いになって)、同じ筋にはものしたまへど(御自分と同じ王家の血筋とは言うものの)、おぼえことに(前斎院は世間の評判も高く)、昔よりやむごとなく聞こえたまふを(昔から最上位のお方として有名でいらしたので)、

「御心など移りなば(殿のお気持ちがあちらへ移ってしまったら)、はしたなくもあべいかな(私の立場が無くなってしまうのではないかしら)。年ごろの御もてなしなどは(殿の私への長年のご寵愛は)、立ち並ぶ方なく(誰にも勝って)、さすがにならひて(今まで来たのに)、人に押し消たれむこと(いまさら他の女に押し消されようとは、悔しい)」など、人知れず思し嘆かる。

「かき絶え(すっかりお渡りが途絶えて)名残なきさまにはもてなしたまはずとも(お忘れになることは無いとしても)、いとものはかなきさまにて(まるで身無し児同然の私を幼い時から)見馴れたまへる年ごろの睦び(見慣れて御出での長年の親しみは)、あなづらはしき方にこそはあらめ(あなどられがちになるだろう)」など、さまざまに思ひ乱れたまふに、

*よろしきことこそ(自分が相手の女より優位だと思えばこそ)、うち怨じなど憎からず聞こえたまへ(殿に浮気の恨み言を愛想めかして申しなさるが)、まめやかにつらしと思せば(心底辛いと御思いになったので)、色にも出だしたまはず(紫君はその懸念を顔色にもお出しなさいません)。　*古語辞典に＜平安時代の物事の評価は「よし」「よろし」「わろし」「あし」の順だった＞とあり、「よろし」は問題が無くは無いが、まだいくらか余裕を持って対処できる物事、という評価なのだろう。

端近う眺めがちに(殿は格子近くに座して庭を眺めて物思いに耽って居る内に)、内裏住みしげくなり(公務で御所にお泊りになる事が多くなり)、役とは御文を書きたまへば(その実、お役目とは朝顔君に御手紙を書きなさることでして)、

「げに(確かに)、人の言葉むなしかるまじきなめり(人の噂は嘘ではないようだ)。けしきをだに*かすめたまへかし(手紙を書くことさえ誤魔化しなさるとは)」と(と紫君は)、疎ましくのみ思ひきこえたまふ(怪訝に思いなさるばかりでした)。　*「かすむ」の語幹は「かすみ(微み、幽み)」で＜ほんの少しの形跡でわかりにくいが何かが在るとは認められる状態＞という意味、かと思う。その＜僅かな形跡＞を見せたのなら、「かすむ」は何かを＜ほのめかす＞。＜わかりにくい＞のなら＜騙す＞、また＜分かり難い＞＜少しの形跡＞なら＜騙して奪い去る＞。＜何かが在る＞が＜わかりにくい＞なら＜誤魔化す＞。